

## 「～ておく」の意味機能について

山本 裕子\*

### A Study of *teoku*

Hiroko YAMAMOTO

#### 1. はじめに

補助動詞の1つである「～ておく」はこれまで「ある目的のためにあらかじめある行為を行う(庵他2000:70)」という「準備」を表すものを中心に議論がなされてきた。いわゆる「準備」の「～ておく」とは次のようなものである。

(1) a. 今日はお客が来るので、早く帰って料理を作っておきます。

b. イタリアに行く前にイタリア語を少し習っておくつもりだ。

(1a) では「早く帰って料理を作る」のはお客を迎えるためであり、(1b) では「イタリア語を習う」のは「イタリアに行く」ためである。このように (1) の「～ておく」は何らかの目的に向けての準備的な行為を表している。先行研究では「～ておく」の用法として、(1) のような「準備」を表すものを第一に挙げることが多い。

しかし、「～ておく」には次のように準備的行為を表すとは言えない用法も見られる。

(2) (図書館のカウンターで)

学生：これ、予約したいんですが。

図書館員：ええと、じゃ、これに記入をお願いします。あとはこちらでやっておきますから。

学生：あ、わかりました。

(3) (会議で、司会者が) では、時間ですので、今日はここまでにしておきましょう。

(2) (3) では準備が必要な事態が存在しない。「こちらでやっておく」「ここまでにしておく」は何かのための準備的行為ではなく、事態に收拾を図る、終結させようとする行為であるように思われる。

また「～ておく」には「放置」とされる用法もある。

(4) よく眠っているから、このまま寝かせておこう。(『日本語学習使い分け辞典』:152)

このように「～ておく」には「準備」以外の用法が見られるが、先行研究ではこうした用法について、十分に考察されているとは言えず、また「準備」との関係も十分に説明されてはいない。では、「～ておく」の意味をどう捉えると、「準備」とそれ以外の用法間との関係が説明されるだろうか。

\*本学非常勤講師

本稿では「～ておく」の意味を再考し、「～ておく」の多様な意味用法を体系的に説明することを試みる。また「～ておく」を用いた場合に、どのような表現機能が見られるかについても、「～てある」など隣接表現との関係を含めて考察する。

## 2. 先行研究の記述と問題点

### 2-1. 「～ておく」の意味

本節では「～ておく」の意味に関する先行研究の記述を検討する。はじめに述べたように「～ておく」は「準備」を表すものをその第一の用法とするというように先行研究の見解はほぼ一致している。しかし「～ておく」が本質的にどんな意味を表すかについて、共通見解があるとはいえない。先行研究では「～ておく」の意味に関して、以下のような3通りの見解が見られる。

1. 「～ておく」は「準備」を表すとみる立場。
2. 「～ておく」はアスペクト的意味を基本とし、そこから「準備」が生じたとみる立場。
3. 「～ておく」は「処置的動作」を表し、文脈によって「準備」や「処置」の用法になるとみる立場。

以下、順に検討する。

1は庵他(2000)をはじめとして、『基礎日本語辞典』(1989)、『日本語学習使い分け辞典』(1994)等に見られるものである。これらでは「～ておく」は「ある目的からあらかじめ動作や行為を行うこと(『基礎日本語辞典』:234)」のように「準備的行為」を表すものを中心にされている。『基礎日本語辞典』(1989)、『日本語学習使い分け辞典』(1994)では「放置」も挙げられているが、「準備」との関係は述べられていない。また(2)(3)のような「～ておく」については言及されていない。

2は吉川(1973)、『日本語文型辞典』(1998)、丸山(1994)等に見られるものである。『日本語文型辞典』(1998)には「(「～ておく」は)ある行為を行い、その結果の状態を持続させるという意味を示す。文脈によって、一時的な処置を表したり、将来に備えての準備を表したりする。(p.247)」と記述されている。つまり「～ておく」は「結果の状態の持続」というアスペクト的な意味を基本とするものであり、そこから「準備」等が生じると考えられている。しかしどのような条件下で「準備」やその他の用法を派生するかという点に関して記述はない。よって、「～ておく」の多様な用法の関係は説明されているとは言えない。またそもそも「～ておく」を「結果の状態の持続」とすると、「～てある」との意味的な相違が明確にはならない。

3は谷口(2000)に見られるものである。谷口(2000)は(2)(3)のような「準備」とはいえない「～ておく」を「あとのことへの準備を表すというよりも、眼前の事柄や事態そのものの終結、完了を表す(p.2)」として、「終結性を持つ『～ておく<sup>1</sup>』』としている。そして「準備」と「終結性」の意味の関連性について、次のように述べている。「『～ておく』という一つの文法形式が準備性、終結性といった相反する性質を持つことは一見矛盾した現象のように思われるが、このことは、『～ておく』の本来的機能を『処置的動作』ととらえ、文脈上、それがあることの前段に置かれた場合には事前処置(準備性)としての、そのことの後段に置かれた場合には事後処置(終結性)としての機能が働くと考えることによって一応の説明がつくものと思われる(同:8 下線は引用者)」。つまり谷口(2000)においても文脈によって「準備」とそうではないもの(終結的処置)に区別されると考えられている。

このように「～ておく」の意味をどう捉えるかに関して、先行研究には統一的な見解がある

わけではない。しかし、先行研究の記述から「～ておく」は少なくとも「何か」に向けての意志的な動作を表すものであるとは言える。ここで問題となるのは、「何か」が「未来に想定される目的」と考えて「準備」を基本とするのか、それとも「何か」は特に指定せず、「何か」に向けての意志的な動作」と捉えるべきなのかという点である。またいずれの立場でも「放置」の位置づけが明確にはなされていないという問題もある。よって、「～ておく」の多様な意味用法を適切に捉えるためには、「～ておく」の基本的意味<sup>2</sup>をどう考えるべきかを再検討する必要があるだろう。

## 2-2. 「放置」を表す「～ておく」

多くの先行研究では「～ておく」の意味として「準備」の他に「放置」を挙げているが、この二つは前接する動詞句や文脈によって決定するとしている。たとえば、丸山（1994）は「積極的な目的」的な動詞であれば「準備」を表し、「積極的な反目的」的な動詞であれば「放置」を表すと述べている。確かに次の例に関しては、前接する動詞句によって、「準備」になるか「放置」になるかが決定しているように思われる。

(5) 期末試験に備えて、習った課を復習しておく。(丸山1994:107)

(6) 車を放置しておく。(同:98)

(5) は「期末試験」という目的のためにあらかじめ「復習する」という行為をすることが述べられており、「～ておく」は「準備」を表すと解釈できる。また (5) では「復習する」という「積極的な目的」的な動詞が用いられている。(6) は放置の例であるが、(6) では「放置する」という「積極的な反目的」的な動詞が用いられている。

一方で丸山（1994）は、『消極的な目的』的な動詞につく場合、「放置」を表すか、「準備」を表すかは文脈によって決定する面もあることも指摘している。

(7) コートをかけておく。(同:98)

(7) は「次に着る時にしわにならないようにハンガーなどにかける」という「準備」と、「客先を訪問したが、帰る時までそこに『保管』してもらおう」という「放置」の2つの意味があるとされる。(7) のような「かける」のほか、「つける」「残す」など丸山（1994）は「状況によってどちらにもとれる動詞（『消極的な目的』的な動詞）」としている。この例からわかるように前接する動詞句と「～ておく」という形式での意味は単純に対応するわけではない。(6) で用いられている「放置する」も文脈によっては「準備」の意味で用いることは可能である。

(6) 違法駐車はいつもすぐ通報して運んでもらうようにしている。しかし、今日は止めた人を特定するために、車の所有者が戻ってくるまで放置しておいた。

このように「放置する」など「積極的な反目的」的な動詞であっても文脈によっては、将来の目的のため行う準備的な動作の意味を表せないことはない。『学習使い分け辞典』や『基礎日本語辞典』においても「準備」については「他動詞が用いられる」とされているが、「放置」については「他動詞」が多く、「自動詞の使役形」が用いられることもあると述べられており、前接する動詞句と「～ておく」が対応するとはいえない。これらのことから「放置」の位置づけは検討する必要があるだろう。

## 2-3. 準備性の希薄な「～ておく」

2-1で述べたように谷口（2000）は (2) (3) のような「～ておく」が準備を表さないことを明確に指摘している。谷口（2000）はこうした「～ておく」を「終結性を持つ『～ておく』」とし、

次の3つに下位分類している。

(8) 「終結性を持つ『～ておく』」

A 事後処置を表す場合：当面問題となっている事態を終結させる行為について用いられるもの。事態の收拾を図る、後始末をするという含みを感じられる。

「あの縁談話は父さんから断っておいたよ」

B 心理的な充足行為を表す場合：具体的な何かのための準備ではなく、限られた機会の中で為し得る行為をしたいという切実な思い。準備性よりも「気の済むように～する」といった心理的な充足感が大きい。

「元気なうちに富士山に登っておきたい」

C 結語：まとまった文章や談話の結びとして用いられるもの。

「最後に、\*\*についてまとめておこう」

2-1に引用した谷口(2000)の「～ておく」の意味についての説明に即して、(8)に挙げたA～Cを見てみよう。谷口(2000)は「～ておく」は「処置的動作」を表し、対処すべきこと(「そのこと」と当該の動作の時間的前後関係によって、「準備」であるか「処置」であるかが決まると述べている。Aについては既に問題となっている事態に対処する、ということから「そのこと」の後段に置かれた場合は事後処置」という説明が可能である。しかし、BやCに関しては「そのこと」に当たるものが明確ではなく、谷口(2000)の記述ではA～Cの生起する条件は十分に記述されているとは言えない。またBは、確かに準備が必要な事態は具体的には想定できないが、「後悔しないように」という将来の時点を見据えた意識はある。目的に具体性はないが、将来の時点を見据えた意識という点では「準備」と同様であるので、Bは「準備」の一種と考えたほうが適切であるように思われる。

### 3. 「～ておく」の意味用法

#### 3-1. 「～ておく」の基本的意味

本節では「～ておく」の基本的意味を検討する。前節で述べたように「～ておく」は「何か」に向けての意図的行為と考えられる。「準備」の例として挙げた(1)では、「何か」つまり行為の目的が文脈に示されていた。本節では「何か」の性質を確認するため「目的」を明示しないものを見てみよう。

(9) a. 勉強しておく。

b. 勉強する。

(9a)では「勉強すること」が何らかの目的、例えば「明日試験がある」、「将来に備えて」など、「勉強すること」よりも未来の時点に想定される目的のためであると解釈するのが、もっとも自然であろう。「おく」を伴わない(9b)では、「勉強する」という行為に何らかの目的があるようには感じられない。このように目的を伴わないで、「～ておく」のみで用いた場合、当該の行為は「行為をする時点より未来にある目的」に向けた行為であると解釈される。よって本稿では「～ておく」の基本的な意味を次のように記述する。

(10) 「～ておく」は「ある具体的な目的(P)に向けて、そのための行為(Q)を予め行うこと」を表す。

この基本的意味を表す用法を、「～ておく」の本来の用法と考え、①「準備」とする。なお、ここでのPは、Qを行う時点よりも未来の時点に想定される事態とする。また、これを次のよ

うに図示する。

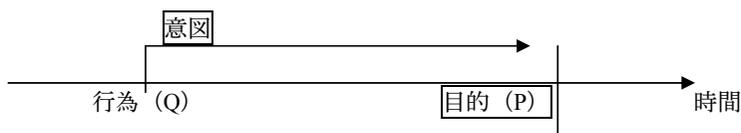


図 1

以上のように、「～ておく」はある具体的な目的 P に向けた行為を意図的に行うことものを基本的なものとする。

次に①「準備」から派生したと考えられる周辺の用法を見ていく。「～ておく」は目的 P の具体性が異なる「準備」の派生的なもの、P が背景化した「放置」、P の時点が異なる「処置」の 3 つに大きく区別される。

### 3-2. 「準備」の派生的用法

まず、基本的意味である「準備」と同様、目的 P に向けての行為ではあるが、①とは目的 P の具体性が異なるものを見る。P の性質によって②「期限内の完了」、③「心理的準備」に区別できる。

#### 3-2-1. ②期限内の完了

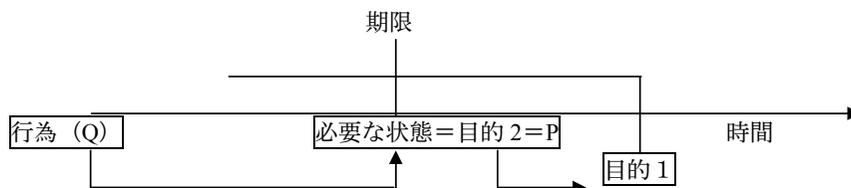
はじめに準備の「～ておく」と異なり、二段階で目的が設定されている状況で用いられる「～ておく」について見る。これは、本来の目的に先立って別の目的があり、そちらに対する行為について用いられるものである。これを「②期限内の完了」とする。次の例を見られたい。

(11) 検査前日の 7 時までには晩御飯を食べておいてください。(由井1997:105 = (28))

(11) は由井 (1997) が「何かを終わらせること」の例として挙げているものである。(11) は「食べ終わってください」と言い換え可能なことから明らかなように、その期限までにその行為を済ませることが表されている。(11) では「7 時までには晩御飯を食べる」ことは検査を支障なく受けるというためという目的があることが文脈から明らかである。この目的を明示する、次のような表現も可能である。

(11') 検査をするために、空腹にしておいてください。

ここでのより本質的な目的は「検査」であり、それに必要な状態は「(食べ終わって) ある程度空になった胃の状態」であるが、(7) で表現されるのは、本質的な目的に先立って必要な行為であり状態である。これを図示すると次のようになる。



目的 1 = 検査      目的 2 (P) = 検査が受けられるように空腹な状態にする  
行為 (Q) = 晩御飯を食べる

図 2

このように②では、時間的に先行する目的2に向けての行為が「～ておく」で表されるが、それより未来の時点の目的1がより本質的な目的である。何がより本質的な目的であるかは文脈から推論される。また②は(11)の「検査前日の7時までに」のように、目的2を実現する期限が明示される必要がある。次も同様の例と考えられる。

(12) A: 今月中には、やったほうがいいんだよね。

B: 今月ぐらいにしとけば、間違いない。

A: はい。はい、わかりました。(『女ことば』8090-8093)

(13) 朝8時までに出しておいたのでゴミ収集車に間に合った。

この場合も本質的な目的は、より未来の時点に予定されている「プロジェクトの実行」や「ゴミの回収」であり、その目的のためにQを完了させることが必要となっている。またこれらは「し終える」「出し終える」と言い換え可能であることから、「終結」のアスペクト性があると考えられる。

### 3-2-2. ③心理的準備

③「心理的準備」は目的Pが現実的に想定されるものではないが、心理的には将来の時点とのつながりを自覚しているものである。「後で後悔しないように」「将来困らないように」といった心理的満足感、安心感を得ることをPとし、そのための行為Qを「～ておく」で表すものである。これは谷口(2000)のいう「心理的充足感」に相当するものである。次の例を見られたい。

(14) 今のうちに、富士山に登っておきたい。(谷口2000)

(15) そりゃーあなた、あなたにとっては、飯の種になる可能性があるんだから、勉強しとかなきゃ、しょうがないよ。(『女ことば』722-773)

(16) (宗教社会学の講義)

えー、でまー、そういったようなことで、この檀家せいの問題とかあるいは僧、サンガの問題ってゆうのを、知っておいてもらいたいとは思いますが、えー、それ以上にまー、知っておいてもらいたいってゆうことがあるわけですね。(『男ことば』2675)

(14)では「富士山に登る」という行為の必要性が現実的にあるわけではないが、話し手は「富士山に登る」ことが生涯一度はすべきことであり、かつ後でできる保証はないことと考えている。また(15)(16)でも、行為の時点では「勉強する」や「サンガの問題を知る」ことの必要性は具体的にはないが、「勉強する」ことや「サンガの問題を知る」ことが後々有益であるという認識がある。このように目的の現実性、具体性という点では①と異なるが、将来を見据えての準備的行為という意識の点では①と同様に話し手には明確に意識されており、①の延長上にあるものと考えられる。またこれを支えているのは「富士山には一度は登るべきである」「勉強はしたほうが良い」といった一般的な価値観である。以上のことから、谷口(2000)はこれを準備ではなく「終結的処置」の下位類としているが、やはり「準備」の1つとみるべきだと考える。

### 3-3. ④「放置」

「～ておく」の最も基本的な意味である「準備」の「～ておく」とは焦点の当たる部分が異なり、行為が継続する、という面に焦点があたると、④「放置」になる。放置では「準備」の目的に向けての行為という面が背景化し、行為が完了してその結果が存続しているという面に焦点が

当たっている。

(17) 駅前の歩道に自転車を止めておく (丸山1994:107)

(18) 車を放置しておく。(丸山1994:98)

上の例は先行研究で「放置」とされたものである。これらでは「準備」と異なり、Qのための具体的な目的がなく、また話し手にQが将来に備えての行為であるという意識も見られない。「放置」はこのように「準備」とは焦点が異なる。では、「～ておく」はどのような場合に「放置」の意味を表すのであろうか。丸山(1994)では前接する動詞句が「反目的的な」ものであったり、長時間継続することを表すようなものである場合には、「放置」になりやすいことが指摘されている。上の(17)「放置する」を初めとして、「保存する」「そのままにする」「維持する」などがそうした例として挙げられる。また前接する動詞句自体は長時間継続することを、必ずしも表さないものであっても、「ずっと」や「一晩中」のような副詞句によって、文脈に長時間継続することが示されれば、継続している面に焦点が当たり、「放置」と解釈される。次の例で確認しよう。

(19) 一晩中、洗濯物を外に出しておいた。

(20) そんなところでずっと自転車をとめておくと、盗られますよ。

(21) 糖尿病をそのままにしておくと、大変な事になります！

このように「放置」は「そのままにする」の他、「～ばなしにする」のように継続することを表す動詞句や「一晩」「ずっと」など継続を表す語を伴うことが多い。しかし既に述べたように前接する動詞句と「～ておく」の意味は単純に対応するわけではない。継続を表す動詞句であっても、(6')で見たように目的を顕在化させれば「準備」の解釈になるので、「放置」の場合も目的Pは背景化はしているが存在していると考えられる。

### 3-4. 「処置」

Qの「目的」が未来ではなく、行為の時点で既に発生している場合、「処置」となる。これは谷口(2000)が「終結性」を表す「～ておく」としているものに相当する。「処置」は処置的行為の妥当性や、必要性の認識により⑤～⑦に区別される。

#### 3-4-1. ⑤「事態の收拾を図ること」を表す「～ておく」

⑤「事態の收拾を図ること」は問題となっている事態、当面話題となっていることの收拾を図り、終結させる処置を表すものである。発話時に收拾をはかる必要性のある事態(Z)が存在しており、そのための処置的な行為としてQがなされる。「準備」の場合のように、当該の行為より未来の時点でPがあるわけではなく、行為をする時点で既に問題化しており、すぐに何らかの対処が必要な事態(Z)に対する行為が「～ておく」で表される。はじめに挙げた(2)は⑤の例である。

(2) (図書館のカウンターで)

学生：これ、予約したいんですが。

図書館員：ええと、じゃ、これに記入をお願いします。あとはこちらでやっておきますから。

学生：あ、わかりました。

(2)は図書の予約をするために必要な行為が望まれている状況での発話である。図書館員の発話から、図書館員が本を予約するにあたっての適切な措置をとるつもりであることがわかる。そしてこの措置によって、問題となっている事態はひとまず終結する。次の例も同様である。

(22) 社員(永尾)が社長に呼ばれる。

社長：永尾!! おまえは情報資料を届けたとき、依頼先の化粧品会社の悪口を言ったそうだな。

永尾：は……はあ……

社長：我が社は依頼された情報を提供すればいいのだ。批評を加えるなんて十年早い!

永尾：……すみません……

社長：私から丁寧に謝りを入れておいた。

永尾：……申し訳ありません。(『東京』1-26)

(22) では、取引先の会社からクレームが来るという事態が行為に先立って発生しており、社長が「謝る」ことでその收拾を図っている。ここではいずれも「～ておく」の発話によって、事態に收拾が図られている。(2)と(22)を「～ておく」を用いないものと比較してみよう。

(2') こちらでやりますので。

(22') 私から丁寧に謝りを入れた。

(2')(22')のように「～ておく」を用いなくても、文脈から事態に対して措置がとられたことはわかる。しかし単発的な行為として述べられるだけであり、その行為によって事態が終結し、今後何らかの対処する必要はない、という将来の時点とのつながりは感じられない。逆に「～ておく」を用いた発話では、適切な措置が取られたことだけでなく、それによって「今後何らかの対処をする必要はない」という含みが感じられ、将来の時点とのつながりが意識されていることも表される。その意味で「準備」と同様の意識も感じられる。

### 3-4-2. ⑥「一時的処置」を表す「～ておく」

⑥も⑤と同様、Qをする時点で既に問題化している事態Zに対するQを「～ておく」で表すものである。しかし、⑤と異なりQがとりあえずの措置であると話し手が認識している。これは吉川(1973)の「一時的処置」に相当するものである。次の例を見られたい。

(23) A：まだ全員そろってないよね。注文どうしよう。

B：とりあえず、適当に頼んでおこうか。

A：うん。足りなかったらまた頼めばいいし。

(24) A：柿持って来ましたんで。

B：あ、はい、どうもすみません。

A：うん、ここ置いとく。(『女ことば』3354-3356)

(25) A：これ、どうしましょう。

B：そうだね。一応、コピー、とっておこうか。

(23)では「適当に頼む」ことが最善策だとは話し手も思っていないが、何らかの措置が必要であるとの認識があり、「適当に頼む」ことはとりあえずできる措置としてなされている。(24)では柿をどこにおくかという当面の問題に対して、「その辺におく」という措置をすることによって、一応の收拾を図っている。(25)でも「コピーをとる」という行為は、発話時点では必要性が具体的にあるわけではないが、「念のために」講じる措置として捉えられている。このように、この措置は一時的な、不十分なものと認識されており、実際、「とりあえず」「一応」などを伴って、当面の措置であることを明確にする文脈で用いられることが多い。一方で、いずれの例にも「後で適切に対応する」という将来の時点とのつながりも感じられる。これを「～ておく」のないものと比較して確認してみよう。

(23') とりあえず、適当に頼もうか。

(24) ここ、置く。

(25) 一応、コピー、とろうか。

いずれの場合も当該の行為に「とりあえずの措置」といった意識や将来の時点とのつながりは感じられない。よって「～ておく」によってQが処置的行為であることが表されていると言える。このようにこれらには将来の時点には目的Pが具体的には想定されてはいないが、今回の行為はとりあえずの措置であり、後でより妥当な措置がとられるという意識がある。Zが解消されず、先送りになっているという点で、未来の時点とのつながりがある。

### 3-4-3. ⑦「終結的宣言」を表す「～ておく」

最後に一連の過程を終結させようという話し手の認識を表す「～ておく」を見る。⑦は谷口(2000)の「結語」に相当するものである。⑦では発話者の場に関わる役割意識などから、それ以前から継続している当面の状況を終結させたいという動機付けがあり、それによって当該の行為がなされるものである。先に挙げた(3)はこの例と考えられる。

(3) (会議で、司会者が) 時間ですので、今日はここまでにしておきましょう。

(3)は場を取り仕切る役割の人物の発話である。(3)により当面の事態は終結を迎え、新たな展開を迎えることになる。次の例も同様に考えられる。

(26) (婚約の噂についてマスコミに聞かれた芸能人が)

ま、そういうことにしといて下さい。(=谷口2000(14b))

(27) (北海道ではなぜ鶏の唐揚げを「ザンギ」というのはなぜかという質問に対する答)

諸説を紹介したあとで ホテルの中華料理店の総料理長のコメント)『『散切り説』だってあくまでも私の説。真相はわからないんです。でも 年以上この世界で生きてきて、それ以外に答えが見当たらない。だからそういうことにしておきましょうよ』と平野氏。

(<http://www.ne.jp/asahi/ys/namaramuchyo/nanda/honbun/zangi.html>)

(26)(27)は、どちらも回答を求められての発話である。「～ておく」を伴う発話によって、話し手は質問に対して答えなければならないという状況を終結させ、次の段階、次の話題へ展開させるようとしている。話し手が発話の場にもどのように関わっているかによって、この局面を終結させる役割が決定する。また終結させようという話し手の主観的な判断を示すものであり、モダリティ化したものである。⑦は過去形では用いられない点からもモダリティ化しているといえる。

### 3-5. 「～ておく」の意味用法のまとめ

本稿では「～ておく」の基本的意味を「準備」とした。そして焦点の当たるところが異なるものを「放置」、当該の行為の目的の設定される時点が異なるものを「処置」とし、先行研究で挙げられている用法の整理を行った。「準備」の「～ておく」は目的の具体性、目的の設定のされ方によって②期限内の完了、③心理的準備の2つに区別できる。また「処置」も処置の妥当性の認識、処置の必要性の認識により⑤事態の收拾を図る措置、⑥一時的措置、⑦終結的宣言の3つに区別できる。以上をまとめて表1に示す。

表1に示したように、目的Pの具体性と事態Zの有無によって、①～⑦は区別される。Pが具体的であれば「準備」になり、そうでない場合には「放置」、Zがある場合には「処置」となる。ただし「放置」や「処置」の場合であっても、Pは背景化はしているが存在していないわけではないと考えられる。以上、「～ておく」の基本的意味を再考し、それを基づいて「～ておく」の多様な用法が派生する仕組みを考察し、各用法の関係を整理した。

表1 「～ておく」の意味用法

		準備が必要な事態 P	対処が必要な事態 Z
準備	①準備	+ 具体的	-
	②期限内の完了	+ 具体的	+ (Q = 必要な措置)
	③心理的準備	- (心理的+)	-
④放置		-	-
処置	⑤事態の收拾を図る	- (心理的+)	+ (Q= 妥当な措置)
	⑥発話時の最善策	(+)	+ (Q= 当面の措置)
	⑦終結的宣言	- (心理的+)	+ / - (行為者が終結させる動機づけを持つ)

#### 4. 「～ておく」の機能：隣接する表現との関係

本節では「～ておく」の表現機能について考察する。日本語教育では意味的な類似性があることから、「～ておく」は「～である」とともに提示されることが多い。先行研究においては、「～である」と「～ておく」の違いは次のように記述されている。『～てある』も将来に備えての準備を表すが、構文の形式的違いのほかに、『～ておく』の場合は、準備として何らかの行為を示すことを示し、「～てある」はその準備ができている状態を示すという違いがある。(『日本語文型辞典』:247-248)。また、丸山(1994)でも両者の主語・主題の違いに注目して、『～てある』は物中心の言い方、『～ておく』は人中心の言い方として日本語教育では指導されると述べている。確かに一般的には、「～ておく」「～てある」の相違は上のような説明が可能である。これを例に即して見てみよう。

(28) 会議に必要な資料について A と B が話している。A は B の同僚。

A : 資料のコピー、しなくちゃね。

B : あ、コピーなら {やっておいたよ・やっであるよ・やったよ}。

(28)は「会議に必要な資料をコピーする」という準備が必要な場面での会話である。(28)では「～ておく」「～てある」動詞の言い切りの全てが可能ではあるが、それぞれニュアンスは異なる。動詞の言い切りを用いた場合、単に行為だけが表され、特にその行為が発話時点に効力を及ぼしているということは示されない。「～てある」や「～ておく」を用いると、その行為が発話時点に効力を及ぼしていることが表される。「～ておく」を用いると行為者に焦点があり、「～てある」では行為者よりも Q が完了しているという状態に焦点がある。次の場合はどうだろう。

(29) 母：テスト勉強は？やったの？

子：もう {\*やっておいたよ・やっであるよ}。

(29)も「テストのために勉強する」という準備が必要な場面での会話である。しかし、(29)では「～ておく」を用いることはできない。(29)ではテスト勉強をするという行為は子ども自身のためであり行為者は自明である。ここで問われているのはテスト勉強を完了したかどうか、その効力が継続されているかどうかである。そのため「～ておく」は不適切であると考えられる。このように(28)(29)ではそれぞれの意味によって、「～ておく」「～てある」の適切性は説明可能である。

しかし、次の場合は事情が異なる。(28)と同じように準備が必要な事態であっても、話し手と聞き手の関係性が異なるため、「～ておく」は不適切になる。

(30) 会議に必要な資料について A と B が話している。A は B の上司とする。

A：資料のコピー、しなくちゃね。

B：あ、コピーなら {?? やっておきました・やっております・やりました}。

(30) では「～ておく」よりも「～である」や動詞の言い切りの方が適切さが高い。これは「～ておく」と「～である」の意味の相違だけでは十分には説明できず、この場合はポライトネス<sup>3</sup>の観点からの説明が必要であろう。

前節までに述べたように「～ておく」は何らかの目的に向けての意志的行為を表す。「～である」も「～ておく」も基本的に他動詞が用いられることから、「～ている」と異なり、行為者の存在が示される。「～である」では暗示的であるのに対し、「～ておく」で構文上、行為者が明示される。こうした点から、「～ておく」は行為者の存在に注目した表現であるとされているのであるが、これをポライトネスの観点から見ると、場合によっては「～ておく」は「恩着せがましい」表現になる可能性があることになる。まず、聞き手にも当該の行為をする義務がある状況で話し手のみがその行為をした場合には「～ておく」を用いると、聞き手が行為をしていないことを明示してしまうことになる。よって「～ておく」を用いると、聞き手にとっては FTA となるため、不適切である。

聞き手に当該の行為をする義務がない状況であれば、「～ておく」を用いてあることを表現しても問題ない。また、「～ておく」は責任の所在を明確にするものであるので、誰かが当該の行為をする必要がある場合には、「～ておく」を用いることにより事態の收拾を計る行為の責任の所在が明確になる。これは処置の「～ておく」に通じる性質である。

さらに「～ておく」（あるいは「～である」）の現れる事態の性質に注目すると、「～てあげる」等、授受表現との関係も考慮すべきであることがわかる。

(31) (仕事で二人で外出していた。外での用事が済んで帰ろうとした時)

(同僚が)「KEI さん、直帰していいですよ。あとは僕がやっておきますから」(といたので)「いいんですかあ?」そんなワケで定時より 1 時間早く帰った (笑) いいのかなあ・・・。(http://diarynote.jp/d/11598/20040407.html に基づく)

(31) の「～ておく」は当該の事態に收拾を図る行為に「～ておく」が用いられており、⑤の「事態の收拾を図る措置」を表す「～ておく」であると考えられる。これを「恩恵性」という観点から捉えるとどうだろうか。「KEI」は同僚の行為によって恩恵を受けることは明らかであり、したがって「KEI」の側から事態を叙述すると「同僚が(残りの作業を)やってくれる」ということになる。しかし、同僚はここで「あとはやってあげますから」のように「～てあげる」を用いることは不適切であり、(31) のように「～ておく」を用いたほうが適切であろう。つまりこのことから、恩恵を与える場合は授益行為として述べるよりも処置的行為として述べるほうが、適切性が高い発話であることがわかる。

一方、話し手が恩恵を受ける場合はどうだろうか。

(32) コピーが既に終わっているのを A が見て驚いて

A：資料、{?? コピーしてあるの?・?コピーしたの?・??コピーしておいたの?コピーしてくれたの?・コピーしておいてくれたの?}、ありがとう

B：いえいえ。

コピーすることが、A、B 双方に課された仕事である場合、B が一人でそれをやったこと、そして A が恩恵を受けたことが明示される形式が望ましい。この場合、処置的行為や状態としてではなく恩恵的な行為として表現されることが期待される。このように、同じ状況であって

も A と B の関係や役割によって、適切性の高い発話は異なる。行為の責任の所在を明示すること、授受表現として述べることのいずれが優先するかが、A と B の関係によって異なっていることが考えられる。こうしたことは、「～ておく」や「～てある」のみに注目しているのではわからない。隣接する発話や、当該の事態の性質にも注目し、ポライトネスの観点からも考察していく必要があることがわかる。

## 5. まとめ

本稿では「～ておく」の意味を再考し、「～ておく」の多様な意味用法の整理を行った。さらに「～ておく」を用いた発話の機能についても考察を行い、従来の説明に加えてポライトネスの観点から、「～てある」をはじめとする隣接する表現との機能の差異についても考察を行った。そして発話の場と話し手、聞き手、事態の4者の関係によって表現の選択が行われていることを指摘し、「～ておく」の意図性が、「責任の所在」として機能していることを論じた。

### 引用文献

- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2000). 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.
- 宇佐美まゆみ (2002). 「ポライトネス理論の展開」『言語』、31巻1号-12号、大修館書店.
- グループ・ジャマシイ編 (1998). 『日本語文型辞典』くろしお出版.
- 谷口秀治 (2000). 『～ておく』に関する一考察 —終結性を持つ用法を中心に— 『日本語教育』104号、1-9. 日本語教育学会.
- 広瀬正宣・庄司香久子編 (1994). 『日本語学習使い分け辞典』講談社.
- 丸山敬介 (1994). 『おしえるためのことばの整理 vol 2』京都日本語教育センター.
- 靱山洋介 (1993). 「多義語分析の方法—多義的別義の認定をめぐる—」『名古屋大学日本語・日本文化論集1』、35-57. 名古屋大学留学生センター.
- 森田良行 (1988). 『基礎日本語辞典』角川書店.
- 由井紀久子 (1997). 「日本語動詞における意味の抽象化過程の研究」『大阪大学文学部紀要』第37巻、1-152. 大阪大学文学部.
- 吉川武時 (1973). 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』、157-327. むぎ書房.
- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

### 例文出典

- 『女ことば』: 現代日本語研究会編 (1997). 『女性のことば・職場編』ひつじ書房 自然談話 FD.
- 『男ことば』: 現代日本語研究会編 (2002). 『男性のことば・職場編』ひつじ書房 自然談話 FD.
- 『東京』: 柴門ふみ (1990). 『東京ラブストーリー1』小学館.
- URL は 2004年7月～9月にかけて、いずれも検索エンジン「Google」にて検索。

### 注

- 1 原文はカタカナ
- 2 基本的意味とは「複数の意味の中で、最も基本的 (プロトタイプ的) と考えられる意味 (靱山1993)」である。
- 3 ここでのポライトネスは B&L (1987) や宇佐美 (2002他) で用いられているポライトネスの概念及び定義に従う。つまりポライトネスは対人的な配慮の結果としての言語行動として、調和の取れた関係を作りだしたり、維持したりすると言った、さまざまな目的を達するために話し手が用いるストラテジーの一つであると考えられる。